

『鎌倉三代記』の構想と趣向

——紀海音独創時代の出発点——

石 田 賢 司

一、はじめに

享保元（一七一六）年正月⁽¹⁾に大坂道頓堀の豊竹座で上演された紀海音の浄瑠璃『鎌倉三代記』は彼の代表的作品として認められるが、その理由の一つには、彼の浄瑠璃作品の中でも最も興行的に成功し流行したことが挙げられるであろう。この流行の様子は享保十二年刊の西沢一風『今昔操年代記』に

御取立によつて上野少掾藤原重勝と口宣を請つぎ。其明鎌倉三代記といへる浄るり。是迄の大あたり。大黒舞のふしこと我もく〜とけいこするもの多。夫よりのかハリ。さのミあたりといふ事なし⁽²⁾

と記されていることから知られる。

祐田善雄氏は『鎌倉三代記』の作品自体を高く評価され、「この中に彼の独創期に於ける執筆方針を十分に示して

居るやうに思はれる。彼が従来の陋習を脱して精魂籠めて作った、けに反響も大きかった。「海音の作品中画期的な意義を持つもので、それだけ熱と力の籠つたものである」と述べられ、その流行に關しても「上野少掾受領に伴ふ興行政策も考へに入れねばならぬが、海音の筆力も大に買ふべきであらう」と述べられた⁽³⁾。

本稿では『鎌倉三代記』における「海音の筆力」、特にその構想と趣向について詳しく見ていきたいと思うが、その根底に宝曆六（一七五六）年刊の浪速散人一楽『竹豊故事』の海音に対する評価があることを述べておきたい。

『竹豊故事』では、近松門左衛門が浄瑠璃作者を生業とした先駆者であったこと、「博学碩才」⁽⁴⁾であったこと、「当世の人氣を察し、世間の世話を能呑込て」浄瑠璃を作り「其文句言妙不思議を綴」ったことを評価し、宝曆までに活躍した浄瑠璃作者の中でも近松はいわば別格として扱っている向きがある。それに対して、海音を含む他の作者は

元来近松程の器量無故か、古語の取誤り・古実の相違・有職の違ひ等間々有て見聞苦敷品も多ければ、畢竟ハ狂言綺語成と了簡せねハならず

と「博学碩才」でなかったことを批難されているが、しかし、その一方では

機転發明の作意劣らぬ所も有、又ハ希有の趣向等も出さる、故大当りを取らる、段、是又何れも達人と云ハんに強て難有るべからず

と評価されている。

なお、祐田善雄氏は海音の作品傾向を三時代、すなわち「先人の構想を擬したり、評判のよかつた先行、同行音芸

の声名と文想に依拠」した摸倣翻案時代、「同じ摸倣翻案と言つても、一度自家葉籠中のものに消化して、海音の息のか、つた姿に変へ、これを根柢に新しく創作しようとする態度」が認められる飛躍準備時代、さらに「技巧的手段による構想の変化を以て、義理を中心に場面の展開を試みようとした」独創時代に区分されたが、祐田氏の根柢にも『竹豊故事』があつたように思われる。さらに、祐田氏は「此の期（独創時代、引用者注）に入つて真の海音の技倆が発揮出来たものと思はれる。この独創期を中心に彼の芸術観を研究する事が海音の玉成した真の姿に近いのであつて、彼の思想的内容が変化した究極の到達点を根柢として彼の芸術観を樹立すべきであらう」とも述べられたのであつた。

右のような視点から、本稿では独創時代の出発点として意義が認められている『鎌倉三代記』における海音の作劇手法について詳しく見ていきたいと思う。

二、『鎌倉三代記』と柳沢騒動

『鎌倉三代記』は、鎌倉幕府初期の御家人で二代將軍頼家の岳父でもある比企能員が北条氏討伐を企て逆に殺された事件、いわゆる「比企氏の乱」を題材としている。

正治元（一一九九）年正月、源頼朝の長男頼家が跡を継いで將軍となつたが、専恣な行動が多かつたために宿老たちによる合議制が始められた。頼家の乳母の夫である比企能員は頼朝の側近として信任が厚く、上野信濃の守護を勤めた。娘の若狭の局が頼家に嫁して一幡を産んでいることからその外戚として、また、頼家の側近に子息らを送り込み、頼朝没後にその権勢は北条氏を凌ぐようになっていた。比企氏の台頭に危機感を持っていた北条時政は、建仁三（一二〇三）年八月、頼家が危篤になると、関東二十八カ国の地頭職と日本国総守護職を頼家の子一幡に、関西三十八

カ国の地頭職を頼家の弟千幡（後に鎌倉三代將軍実朝）に譲与することを定めた。この決定に不満を持った能員は、同年九月に頼家が回復すると時政の専横を訴え、頼家も時政追討を能員に命じた。この密議を聞いた北条政子はこれを父時政に伝えた。能員は仏事にかこつけて時政に誘い出され、天野遠景、仁田忠常によつて殺された。比企の一族は一幡の館に引き籠つたが、政子の命により派遣された追討軍に攻められ、一幡をはじめ比企一族は滅亡した。頼家は母政子の命により出家させられ、修禪寺に幽閉され、將軍は実朝が継承した。

『鎌倉三代記』における海音の獨創性を確認するためには、比企氏の乱を記した史書やそれを題材にした文芸作品からの影響を考えることが方法の一つである。その点では、『吾妻鑑』や『北条九代記』、特に浄瑠璃では頼家を題材とした作品では『頼朝三代記』、『源頼家鞠始』、『鎌倉北条九代記』、『東鑑三代將軍』などを見る必要がある。しかし、長谷川強氏が既に指摘された⁽⁵⁾ように、『鎌倉三代記』は正徳二（一七二二）年に刊行された浮世草子『頼朝三代鎌倉記』に拠るところが大きく、またそのことが『鎌倉三代記』における海音の題材意識の問題を含むことになるので、これらの作品からの影響を見ることは措いておく。まず、ここでは『鎌倉三代記』の梗概を見るとともに、『頼朝三代鎌倉記』からの影響も見ていきたい。影響が考えられる部分には傍線を付し、典拠となった巻章を示したが、長谷川氏の指摘通りではない。

第一、《口扇谷鎌倉御所の段》比企判官能員の娘若狭の局、頼家の寵愛を受け、一幡を産む（巻一の二二）。比企能員、出羽国羽黒山の山伏豪海を目通りさせ、一幡君二百余歳までの延命の祈禱をさせようとする。朝比奈、証拠がないと嘲う。比企一味の中野五郎、朝比奈に同意と見せかけながらも、豪海の祈禱に苦しむふりをする。和田義盛、朝比奈をなだめる。比企、義盛を抱え込もうとし、娘浅茅を朝比奈の嫁にと持ちかける。義盛、比企の意を察し縁組を承知する（巻一の三三）。《中、鎌倉山の段》頼家の弟千幡に対する比企員家の無礼な態度。《切、畠山重忠屋敷の段》頼

家母と千幡が重忠に員家の無礼を告げ、重忠はなだめる。頼家母、千幡の後見を重忠に頼む。重忠、願文を読み上げ、補佐を誓う。

第二《口、鎌倉御所の段》頼家、酒色に溺れている。秩父六郎重安、さらに派手な遊びを勧める。竜宮城の遊びに乙姫に浅茅を召すことを勧め、朝比奈方に赴く（巻一の一、二の三）。《中、和田屋敷の段》祝言が済み、朝比奈は浅茅を避けて逃げ回る。浅茅は実は都六条の傾城であり、重安と馴染みであり会わせて欲しいと願う（巻一の三、一の四）。重安が上使として来、比企の婿となったのは呑込めず、忠心があるなら浅茅を差し上げるべしと言う（巻二の二）。朝比奈得心し、浅茅を呼ぶ。浅茅、重安に恨みを言う（巻一の四）。朝比奈、重安に浅茅を進上と言う。重安、御所に差し上げると言い争う。浅茅、両者を止め、自ら跡をくらし二人の言い分を立て、時を待ち比企と縁を切り、重安と夫婦とならんと去る（巻三の二）。《切、鎌倉御所の段》義盛、乗物で朝比奈の最愛を伴い来ると言う。重忠も朝比奈の妻を連れ来たと言う（巻二の三）。義盛、黒皮威の鎧を示し、朝比奈の最愛と語る（巻二の四）。重忠、頼朝が西行に与えた銀猫を出し、浅茅は実は遊女であり、遊女の生まれ変わりである猫を献じると言う（巻二の三）。兩人の諫言は聞き入れられず、近習が二人を取巻く。朝比奈と重安、追ひ払う。

第三《口、鶴ヶ岡八幡宮の段》若狭の局、一幡君ら鶴ヶ岡八幡宮に参詣。浅茅は鳥追い、若狭の実兄花垣伊織之介は大黒舞の姿で登場。伊織之介、若狭の態度に当て言を言う。若狭、素性が知られるを恐れ名乗らず。伊織之介、打擲を受ける（巻一の一、二、三）。《切、鎌倉御所雪見の亭の段》若狭、伊織之介が重忠らに付き添われ評定所に入ったことを聞く。浅茅は重安に嫁入ることが決まり、若狭の素性が知られるとの報に若狭と浅茅、自害の覚悟。伊織之介、敗訴し由比ヶ浜にて処刑される報が入る（巻四の一、四の二）。

第四《口、「わかさの局道行」》若狭と浅茅、御所を抜け、由比ヶ浜への道をたどる。《中、由比ヶ浜の段》若狭と

浅茅、伊織之介の首を求めて来、重忠の臣本田を非難。夫や子の恥を思い名乗らなかつたが、兄の死を後悔、弔わんとする。本田、若狭の真心を知り、櫃より伊織之介を出す。偽首であった（巻四の二）。伊織之介、豪海が父を殺したために敵討ちに下つたと語る。若狭、自害。父は比企に殺されたのであり、また取り上げられた比企への義理を思い死ぬ（巻四の三）。《切、「まよひの姿絵」の段》若狭の亡霊、頼家を諫める。頼家、悟り髻を切る（巻五の三）。

第五《鎌倉御所の段》頼家、病床にある。比企と豪海、頼家を殺さんとする。朝比奈、二人を捕らえる。伊織之介、豪海を討つ。朝比奈、比企を討つ。

『鎌倉三代記』が『頼朝三代鎌倉記』に大きく拠っていることが確認できたが、ここで問題としたいが、『頼朝三代鎌倉記』の題材意識である。長谷川強氏は「小身者が女色で成上り野心を起す事や、頼家が妻に刺殺される事等後年実録物で有名な柳沢騒動の事も思われる」といった程度にとどめられたが、中村幸彦氏は、『頼朝三代鎌倉記』が刊行された当時は「正徳三年閏五月六日（徳川禁令考）による」に、時事小説やモデルのある戯曲の禁止令が下りた程、政治や社会上の出来事を材とする作品が出現した頃」であり、同書は「鎌倉將軍頼家の時代に行っているが、比々として五代將軍治下のもので、後出するものと比較して、柳沢騒動の実録と同題材なのである」「本筋にも所々、『かんとんの枕』によつたかと思われる点もある」と述べられた⁶⁾。なお、『かんとんの枕』とは、『日光かんとんの枕』（内題「日光那野之枕」と題する作品（落書の類か）であり、柳沢騒動を扱った最も初期のものである。その内容は、綱吉に諫言して上州高崎に貶された八木主税が、日光廟に通夜して主家の将来を祈願したところ、徳川家康の使者が夢に現われて語るという形で、柳沢政治を批判攻撃するというものである。批難の対象は、生類憐みの令、大銭の鑄造、諸侯との婚姻、賄賂政治と、当代の事実の外に、吉保の任地甲府より駿府によって乱を起こし、元来武田家の出である柳沢が、武田の仇敵徳川氏を滅亡させんとしたと誇張することもある。また綱吉の薨後、追腹を切りもせぬこ

とを難じてもいる。中村氏は『頼朝三代鎌倉記』における『日光かんとんの枕』の影響を具体的には述べられなかったが、倉員正江氏は、『頼朝三代鎌倉記』の諸要素（①比企密かに賤女を養女とし、頼家に取り入るべく側室に差し出す②諸大名盛んに比企に贈賄す③比企、祈祷のため法印を頼家に紹介、御意に入り法印・比企出頭す④比企、頼家を自邸に招き、盛大に宴す⑤比企、万民に頼家を疎ませ、天下を手中に収めんとす⑥狐様々の怪をなし、法印祈祷す⑦千幡を調伏す⑧頼家の御台所悪政を憂い、頼家を刺殺す）が『日光かんとんの枕』ならびに当時の風聞を根拠としていることを指摘された⁽⁷⁾。

『頼朝三代鎌倉記』が比企氏の乱をカモフラージュとして柳沢騒動を描いているとするならば、それを典拠とする『鎌倉三代記』もやはり同じ方法で柳沢騒動を描いたと考えられる。倉員氏が指摘された八つの要素のうち、⑥以外は『鎌倉三代記』でも多少姿を変えながらも用いられている。また、海音が柳沢騒動を題材としたのは、正徳四年七月⁽⁸⁾に竹本座で上演された『相模入道千疋犬』に対抗してのことではないかと思われる。重友毅氏が述べられた⁽⁹⁾ように、『相模入道千疋犬』は『太平記』巻五「相模入道田楽を弄ぶ並鬪犬の事」に仮託して、その実は生類憐れみの令を批判している。海音も綱吉の治世を批判しようとしたが、生類憐れみの令を題材としたのでは近松の二番煎じとなってしまうので、柳沢騒動を選んだのではなからうか。

さて、海音が『頼朝三代鎌倉記』に拠らず独自に時事的要素を盛り込んだ（当込みのレベルでなく）と解釈される例として、畠山重忠の言動に注目したい。第一切で畠山重忠は頼家の母から千幡を補佐すること頼まれ、

頼家公のおわけは老臣共が入かはり。千度も万度もいさめをいれそれにもせういんなされずは。お家のためにはかへられず無体に押込参らせて此若君をもりそだて。管仲晏子が義をまもり鎌倉三代將軍と。嘉祝申さは四海の内なびかぬ草木は候まじ⁽¹⁰⁾

と答える。もつとも、『頼朝三代鎌倉記』においても「あまみだい尼御台は。頼家卿の御舎弟ごしやていせんまなきみ千幡君と申を。畠山重忠に御たのみあつて。めのとぶんに仰付られ。聖賢せいけんの道をおしへさせ」⁽¹⁾と記されているが、この一文だけであり、海音が第一切の場面を設けたことは注目される。

たしかに千幡が後に三代將軍実朝となることは実際の史実にも基づいており、その際に畠山重忠の後見があったとも考えられる。しかし、『鎌倉三代記』の千幡を徳川六代將軍家宣と見なせば、畠山重忠は家宣を綱吉の後継者に推した徳川光圀と見なすことが出来るのではないだろうか。綱吉が五代將軍を相続し、嫡男徳松を世継に決めようと御三家に沙汰したが、その際に水戸の光圀は

前甲府殿重公^{室相綱} 存生にて御座候へは、嚴有院殿の公^{家綱}御跡をは御相続有へき所に、逝去ゆへ当大樹公綱吉公御家督御相続なされ候。左候得は、今の甲府殿重公^{綱豊公}綱を御養君に被_レ成、御世統に御定め、徳松殿をは又甲府殿綱吉公^{綱豊公}の御養君になされ候てしかるへく候。直に徳松殿を御世統に被_レ成候義ハ、御尤とは不_レ被_レ申候⁽²⁾

と語ったことが光圀の伝記資料『桃源遺事』に記されている。また、光圀自身も水戸藩主を相続する際に兄弟関係という問題が絡んでおり、同じく『桃源遺事』には

西山公初而史記の伯夷伝を御よみ御感有て、御父頼房卿の御世継にハ御兄頼重殿御たち可_レ被_レ成所に西山公御世嗣に御たち候段、甚本意ならず覚召候。自是して御嫡家へ御讓被_レ成度の御存念おこり申候。

と記されている。三田村鳶魚氏はこの二つの出来事を「伯夷伝」によって関連付け、光圀は「綱吉將軍が自分の子供にすぐに後を継がせるなんていうことは、なかなか承知されるわけではない」と述べられた⁽³⁾。『史記』巻六十一「伯

夷列伝」によれば、孤竹君が長男の伯夷ではなく次男の叔斉を世継に立てようとし、伯夷も父の遺言に従った故事が記されている。また、周の武王が殷の紂王を討とうとした際に、伯夷叔斉兄弟は臣が君を殺すことは仁に背くと諫めたが聞き入れられず、周の禄を食むことを恥じて首陽山で蕨を食って餓死した故事も伝えられている。

『鎌倉三代記』では、第二切で畠山重忠と和田義盛が頼家を諫めて勘気を蒙り、畠山と和田によって「三たびいさめていれられねは身をしりぞくは君子の道。首陽しゅやうのわらびに世をししのぎ渭浜ゑいひんに釣つりをたのしまば鎌倉計に日は照あまい」と伯夷のことが語られる。ただし、これは『史記』が伝える伯夷の故事ではなく、『漢書』卷八十七下「揚雄」が記す「昔三仁去而殷虚。二老婦而周熾」⁽¹⁴⁾に基づいていると考えられる。さらに言えば、海音が中国故事を使用する際には漢籍そのものからではなく和製類書を典拠とし、その一つに元禄七（一六九四）年刊『訓蒙故事要言』があると神谷勝広氏は指摘された⁽¹⁵⁾が、やはり同書の卷之二には「三仁去而殷虚。二老婦而周熾」⁽¹⁶⁾が記されている。そして、

三仁去而殷虚シトハ、殷ノ紂ガ臣下ニ微子箕子比干トテ三人ノ仁者アリ（中略）紂余リニ無道ニシテ暴虐ヲスル故ニ、三仁、謙ムレドモ不レ聞、微子ハ諫ムレドモ、紂聞ザルニ依テ殷ツイニ亡ンコトヲ知テ他国ヘ去。（中略）二老婦而周熾トハ、二老ハ伯夷ト太公望トナリ。伯夷ハ（中略）殷ノ乱ヲ避テ北海ノ浜ニ身ヲ隠シテ居レリ。文王ノ聖徳アルヲ聞テ出テ、文王武王ニ代ニ仕フ。太公望モ殷ノ紂ガ無道ナルヲ見テ、渭水ノ浜ニ身ヲ隠シテ釣ヲタレテ居レリ。（中略）此ニ人文王ニ帰服シテ、周熾ンニナリ、武王遂ニ紂ヲ討テ天下ヲ有チ玉ヘリ。⁽¹⁶⁾

との解説も付けられているが、畠山和田の詞はこれに拠ったものではなからうか。

このままで、『史記』や『訓蒙故事要言』から伯夷の伝記を調べたが、次の四点が彼の人物像として認識される。①

父の遺言に従って弟の叔斉に家督を譲ったこと、②殷の紂王の放埒から起こる乱を避けたこと、③周の文王の聖徳を慕って仕えたこと、④武王が紂王を討つことは仁に背くと諫めたことである。

『鎌倉三代記』第二切において「ち、ぶは伯夷が仁をとき」と語られるのは①②③の意味を含んでいると思われる。「首陽のわらびに世をしのぎ」という詞に拘れば④の意味になるが、畠山が比企を諫めるわけではないので、この可能性は無い。妲己を寵愛するあまりに「酒池肉林」の故事を残すほど酒色にふけり政道を顧みなかった紂王に頼家を準備していると見れば②の可能性が残る。千幡が聖徳を備え、畠山が彼を補佐すると誓ったことを考えれば③の可能性も残る。そして、③に関連して、將軍として相応しい人物であれば兄弟の序列に関わらず、弟が世継となるべきという考えに基づいているならば、①の可能性も残り、特に①に注目すると、畠山重忠の言動は、『史記』「伯夷列伝」に傾倒し家宣を綱吉の後継者に推した徳川光圀を匂わせていると解釈できないだろうか。

三、若狭の局の自害を中心に見た構想と趣向

前章で『鎌倉三代記』の梗概を述べてその全体像を見たが、「第一、第二で、頼家の放縦、比企一族の横暴と、それを何とか諫めようとする和田、畠山の二重臣を描き、第三以降では、比企判官能員が謀のため養女にした、若狭、浅茅を中心に据え、若狭の兄花垣伊織之介をからませて、間接的に比企判官のたくらみを暴いてゆく」ことが描かれているという視点から、『鎌倉三代記』の構想について「作品全体の中心となる人物がなく、統一的な緊張感を欠く」という評価がある。しかし、第三以降の主題を再考することによって、この評価を見直すことが出来ると思われる。

第一・二の主題については再考しないが、『頼朝三代鎌倉記』でも用いられたそれとあまり変わるものではないと

思われる。いわゆる《お家騒動》の世界⁽⁸⁾である。しかし、第三以降では比企の謀を暴くと同時に伊織之介若狭兄妹の《敵討ち》の趣向⁽⁹⁾を盛り込む⁽²⁰⁾ことにも重点が置かれている。特に第四中の若狭の自害は『鎌倉三代記』の悲劇的局面であり、全段の中でもクライマックスであるが、若狭はその理由を

聞は聞程みづからは世にながらへんやうはなし。判官殿の常々に。わかさの誠の親兄弟生て此世に有内は。いつか名乗出べきと心のやすまることなしと。たはふれごとへの給ひしが。其がうかいといふ法師わけてこんしの中なれば。それを頼てと、様をころし給ふに紛なし。討れし親も自ゆへ。討する親も自ゆへ。今又ねらふは誠の兄。手引をせぬは不孝也心を合せは是迄の。ゑいぐはの恩に預し後の親をば親とする。義理にそむくが悲しさに。かくこそ思ひ定めしぞや。

と語るように《敵討ち》が重点とされていることがわかる。そして、『頼朝三代鎌倉記』と比較すると、これが海音の独創の特徴である。それでは、『お家騒動』の世界に《敵討ち》という趣向を盛り込むために、海音はどのように展開させているのかを若狭の言動や描写を通して詳しく見ていきたいと思う。

若狭は第二口で初めて登場し、彼女の人物像は「じつていつくる風俗の。つまはづれさへやさしけれ」と描かれ、頼家や比企能員・員家親子の放埒を諷める様子は「心一ッばい理をせめて恥しめる。こそ道理なれ」と描かれる。若狭は真面目で実直、身のこなしが優美、分別を弁えた女性である印象が与えられる。

しかし、第三口で伊織之介は大黒舞の替え歌で、若狭が彼に対して酷くあたることを責める。第二口で描かれた人物像とは違った印象を受けるが、若狭が伊織之介の妹を名乗り出ないことに對する非難と頼家・一幡・比企を庇おうとする若狭の義理との対立があるように思わせて展開する。若狭は、「浅ましく見る影もなきなりかたち」となった伊織之介の境遇を「身にも命にもかへてくるしう思ふ」のだが、「国のため家のため又子孫のため。三つをひとつに

からめたるせつなひ義理」のために「ひとりの兄あににつらい共いっしょ犬いぬちくしやうといはれても。名のらぬ妹が心か」と他人事を装いつつも、伊織之介に理解を求める。そして、この後も若狭の葛藤が強調されて描かれる。

第三切では、伊織之介が詮議を受けることになる。若狭は伊織之介の弁護をするつもりであるが、その詮議は若狭と浅茅の素性を糺すものであり、若狭には為す術なく成り行きを見守るだけである。若狭は浅茅に、大黒舞が実の兄であることを打ち明け、「諸国の大名小名にわかさのつばねとかしづかれ。ゑいぐはを見るは君の恩」「もとの根ざしは判官の。悪あくにもあれぜんにもあれ。しゆみよりのたかき恩ぞかし」「一幡君の一もんに大こくまひといはれんは。疵きずある玉のごとくにておや子のひかりはきえうせん」「親子のひかりうせたらば判官一家はほろぼされん」と語り、頼家と比企への恩、一幡と比企一家の将来を案じて妹を名乗り出なかつたことを打ち明ける。しかし、その一方で「今こそつれなくする共若君御代をつぎ給はゞ。心のまゝに親兄へ御かうく申さん」と考えていたのだが、この時点では兄を救うことも叶わず、「むくひの来たりしと。思ひ出すさへ浅まし」と声を上げて泣くばかりであった。詮議で、若狭が比企の実の娘ではなく、かつては傾城であったことが明らかとなりかけ、若狭は一幡と共に自害する覚悟を決めるが、一転して伊織之介が騙りの咎で処刑されるとの報せが入る。若狭の葛藤は「命をのぶる悦びの中に歎なげを引出す」と語られる。

若狭と浅茅は、伊織之介の処刑が行われた由比ヶ浜に到着し、獄門を見て「有のま、成有ことをいひもひらかでやみく」と。非道ひだうのおきてにあひ給ふ是といふのみづからが。名のりて出ぬあやまりを百千万のいひ分も。今ではかひもなきささこぐ。あまの小船おふねのこがれ来てせてさいごの御顔をおがまんとこそ思ひしに。はやくもかはる兄上の。御面おもかけ」と倒れ臥して泣くばかりである。若狭はそこへやって来た本田次郎に詮議の結果について批難し、畠山を呼ぶよう命じる。本田は畠山に替わって返答すると答え、若狭は「あの高札にわかさのつばねが兄いおりの介と書付かき

しは。慥なせうこ有ならん。しかるうへには彼者を上をいつはりかすめしとて。なぜけいばつにはおこなふたぞ。但
いつはりものならばわかさの兄とはなぜかいたぞ」と問う。それに対し本田は「非理法権」の「権」を政道に用いた
と答える。なお、たとえば仮名草子『尤之双紙』（寛永九（一六三二）年初版刊か）下廿七「押さる、物のしなじな」に
は「非はもとより理におさる。理は法度におさる、法度も時の権におさる。権は天道におさる、」と記されてお
り、また、『西鶴織留』巻六ノ四によれば、楠正成は旗指物に「非理法権天」と書き記していた。『鎌倉三代記』のこ
の場で言われる「権」とは「りひぜんあくもかへり見ず。法もむほうもわきまへ」ない比企能員であり、伊織之介が
若狭の兄であることは「理も有法もそむか」ないことだが、「けんゐには又おさる、」ために刑に処さなければなら
なかつたと答える。

さらに本田は「いける時にはぶれいをし物をもいはぬしに首に。ぐどく」としたいひわけは心得がたし」と嘲笑
う。若狭は妹であることを名乗ることは頼家・一幡・比企の恥辱であり、名乗らぬことは「いおり殿。只一人のちじ
よく」として済むと考えていたが、それが「いとかろくしきれうけん」であつたと後悔する。そして、「兄うへ
の。身をほろばせしくやしざのいひわけ」をし、「御首を。けふりになしてなき跡を。とふら」う意思を語る。守り
刀を手にして詰め寄る若狭と浅茅の心底を知つた本田は、実は生きていた伊織之介を若狭に会わせる。伊織之介は若
狭の心底を知つて満足し、鎌倉へ下つた本当の目的を語る。それは兄妹の父親玄藩を殺した豪海を討つためであつ
た。突然若狭は自らの胸元を守り刀で突き刺し、伊織之介にその理由を問われるが、先にも見た通り、敵討ちの手引
をしないことは実の親に対して不孝となるが、伊織之介と心を合せて比企を討つとなつて「是迄の。多いぐはの恩に
預し後の親をば親とする。義理にそむく」ことにもなり、若狭は葛藤の末に自害を選んだのである。

これまで若狭の言動を詳しく見てきたが、若狭が伊織之介の妹であることを名乗り出ず、伊織之介が窮地に立たさ

れることに若狭は心を痛めながらも比企に対する義理を守ろうとする葛藤こそが、第三以降の主題として観客に強く印象付けられたと思われる。そのように観ることは海音の狙い通りであろう。そして、伊織之介が処刑されていなかったという予想外の展開に興味を持たせることこそが海音の本当の狙いであったと思われる。予想外の展開はさらに続き、伊織之介が父の敵を狙っていることを語り、それを知った若狭が自害する新しい状況が発生する。そのように考えると、第三口で伊織之介が「さらはゞ兄には成まいがたつた一言人しれず。とはで叶かなはぬ事有てかたちをやつしなりをかへ。やうくめぐりあひたるぞ」と語ったこと、第三切で若狭が「見すて、帰る恨といひ打た、かれる無念さに。そんに出させ給ふ事恨つらみとさらに思はれず」と語ったことは、伊織之介が窮地に立たされる以外の主題が存在していたことの伏線であったと思ひ返される。

土田衛氏は、『傾城三度笠』をはじめとする海音の世話浄瑠璃の手法について「主筋の展開が脇役の言動一つでどう変化するかわからない興味、主人公が外的状況の中で翻弄されてゆく事件の展開への関心、これらが観客の楽しみであり、海音の狙いであった」と述べられた²⁴が、それは世話浄瑠璃に限らず『鎌倉三代記』における若狭の自害までの展開（主筋の展開ではないが）にもあてはまると思われる。そして、ここで強く述べたいのが、『敵討ち』という趣向が単なる目先の変化ではなく、『お家騒動』という世界に収束されていることである。伊織之介若狭兄妹の父の敵は豪海だが、その背後には比企能員がおり、比企一味を討つことは、父の敵を討つことのみならず『お家騒動』の元凶をうつことでもある。

『鎌倉三代記』全段が『お家騒動』という主題だけで貫かれていると考えるならば、たしかに統一的でないという印象を受けることは免れない。しかし、『お家騒動』に『敵討ち』を盛り込み、ダブルプロットに発展させ、またその二つが収束するという筋展開（そこには謎解きの感興が大いに盛り込まれていると思われる）を考えると、祐田善雄氏の

述べられた「技巧的手段による構想の変化を以て、義理を中心に場面の展開を試みようとした」海音の手法が理解出来るのではないだろうか。

四、おわりに

「はじめに」で述べたように、本稿では『竹豊故事』が海音を「機転発明の作意劣らぬ所も有、又ハ希有の趣向等も出さる、故大当りを取らる、」と評したことを根底にして、『鎌倉三代記』における海音の作劇手法を詳しく見、流行の理由を探ろうとした。

しかし、『鎌倉三代記』流行の理由には作品が優れていたからというだけではなく、上演された当時の興行界の動向とそれに対する観客の関心を考える必要があると思う。まず、第一に若太夫が上野少掾を受領したことによって豊竹座が注目されたことが挙げられる。そして次に、竹本座では正徳五年十一月から『国性爺合戦』が上演され、大いに流行していたことも考えたい。『今昔操年代記』はその様子を

筑後芝居相続如何と町中門弟おもひの外。竹田出雲頓知発明より。国仙爺合戯といふ浄りのおもひ付。門左衛門老功の一
作。力瘤を出し。文句のはだへうるハしく書まハしたる筆勢。おもしろく浄るりハ竹本政太夫。竹本頼母。豊竹万太夫右三人
にてあしかけ三年持こたへ。見物から子齧の道行口まねせぬ人なし。筑後掾存命の比あやつり上るりしかくなかりしが。諸人
歌舞妓芝居よりおもしろきともてはやし。次第くにはんじやうする事。第一作者の趣興。人形いしやう。道具まで花やかに
こしらへ。手をつくし美をつくせば。歌舞妓ハ外に成て。浄るりの評判はしくつちく。耳かしましくおもひ参らせ候

と伝える（『国性爺合戦』の流行も当時の興行界の動向、すなわち筑後掾の後継者問題を考える必要があるが、それは別の機会で

「考えたい）。竹本豊竹の東西両座が互いに競い合い、作品や演出に趣向を凝らしたことによって、人形浄瑠璃が発展・繁栄したことは『竹豊故事』が

竹本 豊竹両座と成てより、東ハ西に負まじ、西ハ東ニ勝らんと、互ひに励ミ出来、益々芝居繁栄し、浄瑠璃の作者ハ種々様々の趣向を工ミ出し、道具建にも金銀を惜まず、金襴にて舞台を暉かし、或ハ数奇屋懸りの控成思ひ付に智慧袋の底を振ひ、人形の衣裳にハ縮緬・緞子・縞子・金欄等にて美麗を尽し、詰人形の外ハ皆々足付と成、出遣ひの外ハ介錯・足遣ひ・立懸り、歌舞妓役者の所作より増りて天晴見物事也。併し西か東か一座斗にてハ斯繁昌もせまじ

と伝えるところであるが、『国性爺合戦』と『鎌倉三代記』が同時期に流行していたことは、この道筋を付けるのに大きな役割を果たした。その意味でも、『鎌倉三代記』は人形浄瑠璃史にも意義が認められる作品である。

- 註(1) 『外題年鑑』(宝暦版)では享保三年正月二日を初日とし、『紀海音全集』第四卷の解題でもそのように記されている。しかし、『義太夫年表 近世篇』第一卷では、『鸚鵡籠中記』に豊竹若夫が上野少掾を正徳五年秋に受領したと記されていることと、『今昔操年代記』に「上野少掾藤原重勝と口宣を請つぎ。其明鎌倉三代記」と記されていることを併せると、その上演時期は享保元年正月であったと考えられることが示されている。本稿では『義太夫年表』に従うこととする。
- (2) 『今昔操年代記』の本文引用は芸能史研究会編『日本庶民文化史料集成』第七卷人形浄瑠璃(三一書房、一九七五年十月)による。
- (3) 『紀海音の著作年代考証とその作品傾向(下)』(『国語・国文』第六卷第八号、一九三六年八月)
- (4) 『竹豊故事』の本文引用は芸能史研究会編『日本庶民文化史料集成』第七卷人形浄瑠璃(三一書房、一九七五年十月)による。
- (5) 『紀海音の浄瑠璃に及ぼしたる八文字屋本の影響——「鎌倉三代記」「傾城無間鐘」について——』(『国語と国文学』第三

- 八巻第九号、一九六一年九月)。なお、長谷川氏は『鎌倉三代記』の上演を享保三年正月二日と認識されている。註(1)で示したように筆者は享保元年上演説を採るが、それでも『頼朝三代鎌倉記』と『鎌倉三代記』の影響関係が変ることはい。
- (6) 『柳沢騒動実録の転化』(『語文研究』第二十六号、九州大学国語国文学会、一九六八年十月)
- (7) 『正徳期の浮世草子と時事雑説——『柳沢騒動物』の展開を中心に——』(『近世文芸』第五七号、日本近世文学会、一九九三年一月)
- (8) 内山美樹子氏「弘徽殿鶴羽産家」の背景、いわゆる「正徳の治」(『浄瑠璃史の十八世紀』、勉誠社、一九八九年十月)における上演時期考証による。
- (9) 『近松の政治批判——『相模入道千疋犬』を中心に——』(『近世文学史の諸問題』、明治書院、一九六三年十二月)
- (10) 『鎌倉三代記』の本文引用は『紀海音全集』第四卷(清文堂、一九七九年十二月)によるが、節章は省略した。以下同。
- (11) 『頼朝三代鎌倉記』の本文引用は『八文字屋本全集』第三卷(汲古書院、一九九三年七月)による。
- (12) 『桃源遺事』の本文引用は『徳川光圀水戸義公伝記逸話集』(吉川弘文館、一九七八年七月)による。
- (13) 『黄門様の八つあたり』(『三田村鳶魚全集』第四卷、中央公論社、一九七六年三月)。初出は江戸叢書『御家騒動』(早稲田大学出版部、一九三三年十一月)。
- (14) 『漢書』の本文引用は『和刻本正史 漢書』(汲古書院、一九七三年八月)による。
- (15) 『紀海音と中国故事——媒体に注目して——』(『日本文学』第四十二巻第十二号、日本文学協会、一九九三年十二月)。なお、神谷氏は『鎌倉三代記』第二切の「三仁去て殷じんたつむなく。茫はんざつ増死して楚そは亡ほろびし」の詞が『訓家故事要言』によっている可能性があるとして述べられた。
- (16) 『訓家故事要言』の本文引用は江戸怪異綺想文芸大系3『和製類書集』(国書刊行会、二〇〇一年十二月)による。
- (17) 『浄瑠璃作品要説』へ2『紀海音篇』(国立劇場芸能調査室、一九八二年三月)
- (18) 『世界綱目』では「歌舞妓時代狂言世界之部」に「頼家治世」を挙げ、また「歌舞妓御家狂言世界之部」も設けている。
- (19) 『鎌倉三代記』は「頼家治世」であり、「御家狂言」でもあるが、本稿では後者を優先した。
- 『敵討ち』の趣向を指摘されたのは富田康之氏「海音の趣向の整理」(『海音と近松——その表現と趣向——』、北海道大学『鎌倉三代記』の構想と趣向

図書刊行会、二〇〇四年三月）であるが、富田氏は「趣向」という用語を「作者の仕組んだ類型的な素材・構想という広い範囲を含めた意味」で使用されている。本稿で筆者は「趣向」ならびに「世界」という用語を『戯財録』が「大筋を立てるに、世界も仕ふるしたるゆへ、あり来りの世界にては、狂言に働きなし。筋を組立てる故、堅筋・横筋と云。（中略）堅筋は世界、横筋は趣向に成。堅は序なり、おおきり大切まで筋を合せとも働なし。横は中程より持出して働きて成て狂言を新ら敷見せる、大事の眼目なり」と述べるのに基づいた認識で用いた。

- (20) 『世界綱目』には「御家狂言之内敵討之部」が設けられているが、その例として「義士伝」が挙げられており、『鎌倉三代記』のように《お家騒動》に《敵討ち》を盛り込んだものではないので、この世界の名称は用いなかった。なお、浦山政雄氏「絢交ぜと世界」（『芸能と科学』5 芸能論考Ⅱ、平凡社、一九七四年一月）によると、「絢交ぜ」という用語は二つ以上の世界の混在が要件とされている。《敵討ち》自身も世界となり得るが、それは実在の事件であることが条件であると考えられ、『鎌倉三代記』の場合には「絢交ぜ」とは言えない。

- (21) 『尤之双紙』の本文引用は新日本古典文学大系74『仮名草子集』（岩波書店、一九九一年二月）による。
 (22) 新潮日本古典集成『浄瑠璃集』解説（新潮社、一九八五年七月）